



陽爻[---]・陰爻[- -]のフィールド・リサーチ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤田, 正 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011261

論文

陽爻 [----]・陰爻 [— —] のフィールド・リサーチ

藤田 正

阪神淡路大震災後、面接・調査など、フィールド・リサーチで収集した資料が多数ある。が、この資料が含む教訓を効果的に伝えるためにはどのような表現が必要なのだろうか。表現は我々のコミュニケーションを支える媒介として機能するが、その種類は、建造物、言語、記号、身体など多様である。震災後、フィールドワークしてきた、地域分析の指標としての「神社・お地蔵様」・「墓」は建造物表現であり、現在、分析を進めている俳人・凡兆の「俳句」は言語表現であり、私の主要テーマである「リーダーシップ」は社会的な行動表現といい得る。そして、H.A.サイモン（1969）は、「われわれが現在生きているこの世界は、自然的世界というよりは、むしろ人間によってつくられた人工的世界というべきである。…そのうえ…環境の重要な部分はほとんど「記号」とよばれる人工物から成り立っている」と指摘する。そこで、本論では、韓国旗などでよく目にする「陰陽・易」の陽爻 [----] と陰爻 [— —] という記号表現をとりあげる。第一の理由は、中国で生まれた「易・陰陽」の考えが日本文化に影響していることを否定できないし、現在もなお、数多くの神社に「恋の行方を占う恋みくじ」があり、さらには、最近の陰陽師・阿部清明ブーム、繁華街の「占い小路」、マスコミの運勢占いなどなど、「陰陽・易」の考えが現在の我々の生活の一部を構成しているからである。が、「易」には「淫するな（溺れるな）…加地 1994」という戒めがあり、宇宙万物の変化の原理を示すとされる「易」の様々な考え方は難解で、さらには「当たるも八卦、当たらぬも八卦」とされる。難しさと低予測性の二つが揃った「易」に手をつけるのは正直ためらうが、陽爻 [----] ・陰爻 [— —] は、いわば最も分析対象数が少ない記号表現の事例である。この少なさが、陽爻 [----] ・陰爻 [— —] を取り上げる第二の理由である。本論の目的は、陽爻 [----] と陰爻 [— —] のパターンに潜む構造を検討し、その過程を通して、フィールド・リサーチでの資料整理の方途を探るヒントを得ることにある。

* 易の展開

まず、素人の私が理解できた点から述べる。ライプニッツは自らの、有無・二分（例、0・×）を用いる二進法との近さを「易」に想起したとされるが、易では宇宙のすべてを象徴する構成単位を陽爻 [— — —] と陰爻 [— —] に二分して表示する。竹内（1967）は、「世界が一对のものの集合累積にはかならない」とする考えと表裏一体の、陰陽的世界観を [1 - 2] 反復の過程…「一を一と一に分ける二分法」と説明するが、こうされると中国思想に疎い私は腰が引けてしまう。が、用いられているパターン、記号表現そのものは中国語の分からぬ私にも考えることが出来る。そして、陽爻 [— — —] と陰爻 [— —] の二分は二進法的に、陰陽二爻の「二」が「二」段に重ねられて「四」象となり、そして、三段八卦となり、さらに、この八卦二つを組み合わせて上下「六」段にした六爻の六十四卦を得る。この六十四卦で終りとするかどうかについては諸説あるが、六十四卦個々を説明する言葉を抜きにすれば、この展開自体は理解できる。さらに、「易」では爻を下から読む。これは過去の影響があるとする考えを示したもので、四象の場合は「下→上」の二段階だが、そこには「下→中→上」の三段階の変化過程が想定されている。この過去の影響という視点も理解できる。これらのことが陽爻 [— — —] と陰爻 [— —] のパターンを分析対象の手掛かりとした時にまずは理解し得たことである。が、陰陽二爻から六十四卦への展開で「二と三」という数がしばしば出てくる。高田淳（1988）は説卦伝の参天兩地（天を參にし地を兩にす）を「天は大円、数でいえば直径の一と周円の三、すなわち一が三を含む形を示す。形氣を持つ地は天の中に在るが、方形という限定性において天の一を欠き、二となる。逆にいえば、一が三を含むとは天が地の二をふくみ、かつ一をますことをいう」と解説する。これはいわば「一・二・三」のダイナミックスについての説明だが、「1 → 2 → 3…」の順序数に慣れた私は正直惑いを覚える。そこで、私に分かる「二・三・四・六・八・六十四」の展開での、参天兩地の「二と三」を重視した上での掛け算の使用に注目する。掛け算は二つの三人一組の集団の人数は3人×2組=6人というように異なる単位を前提とする計算であり、同じ単位を前提とする加減算とは異なる。つまり、この視点でいえば天と地は異なる単位となる。が一方、高田の説明には加減算がある。これは天と地が完全に独立した別個の単位ではないことを示している。どうやら「太極・一」の理解が難しそうである。ここまでが、つまり、陰陽二つの構成単位は「一つ」の太極の、いわば表・裏で、太極の「一」は宇宙を示し、「二と三の掛け算」で想定した六十四卦で宇宙全体を描くと説明される易についての私の出発点的理解である。

次に、事象予測性という視点で「易占い」を捉えてみる。この場合、六十四卦の言語内容分析をした上で測定指標を抽出し、予測の当否に関わるデータを積み重ねるという科学的実証が必要で、そのデータの紹介が真っ先に行われるはずだが、ごく一部の科学性を宣伝文句にしているも

のを除いて、そうはなっていない。どうやら事象予測性に焦点は当たっていないようである。ある時、加地らが独自に作った開巻法（加地伸行編 1994 易の世界 中公文庫）を用いて、ある社会心理学研究会で若い研究者に「易占い」を試みたところ、まずは鼻先で笑われた。が、それでも何人かは「易占い」に興味を示し、「当たった、当たっていない」と騒ぐ。そして、10分もたたない内にその「卦」の内容を忘れてしまう。驚くほど見事な、速やかな忘却で、まるで心理学者・エビングハウスの「無意味」綴りの記憶実験である。どうやら彼等も易の予測性を問題にはしていない。

なぜ、「卦」について、このような態度が成立するのか、という問題は興味深いが、本論では「卦」の事象予測性ではなく易の考え方に焦点を当てる。このような場合、中国思想の理解から進めるのが正当な研究方法だが、残念ながら六十四卦を説明する言語表現は私には理解できないことが多い。が、先に述べたように陽爻 [---] と陰爻 [— —] のパターン、記号表現は理解できる。また独特とはいえ二分法が用いられていることも分かる。そこで、このわずかに理解可能なことを検討の手掛かりとする。これは素人の立場から出発することだが、いかなるフィールド・リサーチでも、そのフィールドでの研究者の最初の立場は素人以外のなにものでもなく、そこから、フィールドで得たデータをもとに自分の考えを変更しつつまとめる。これと類似の過程、つまり、「易の世界」を素人の私がフィールド・リサーチしてみる。これが本論における私の基本姿勢である。

* 想定：陰陽爻選択前・八パターン

高田淳（1988）は、「陽 [---] は、一であるとともに三である。すなわち、陽 [---] は陰 [— —] の中央の虚を實にすること」と述べる。これは「陰 [— —] が一であるとともに二」であり、「易・陰陽」における「一」が、我々の持つ常識的数「1」とは異なった意味を持つことを示す。確かに「参天兩地」、「掛け算」を想定すれば、六十四卦への計算的展開に違和感はないが、「太極・一」はどのように考えればいいのか。この疑問を考えるために、易では「なぜ、陽爻 [---] と陰爻 [— —] のパターンを使用するのか」。決まりごとと言われればそれまでだが、「なぜ、中央の虚・実のみに注目してパターン化するのか。なぜ左・右の虚・実は用いないのか」という極めて素朴な疑問に注目する。

陽 [---] と陰 [— —] の二つのパターンは、a) 横棒の有・無、b) 「左・中央・右」の三つの位置、という二つのルール of の組み合わせで構成されている。すると、「0・—」を用いても同じだが、その全ての組み合わせは、二の三乗＝八つ（---、-0-、--0、-00、0--、0-0、00-、000）、のパターンがあるはずである。だが、「易」ではこの内の二つ、陽 [—

---] と陰 [— —] に類似する (---、-0-) を使用しているように思える。そこで、この八パターンを「陰陽爻選択前・八パターン」と想定し、そこから (---、-0-) が [---]・[— —] として選択されたと考え、この「陰陽爻選択前・八パターン」を本論の具体的な検討対象とする。

変化（「易」という言葉の意味）過程を示す八卦は [---]・[— —] を三段に組み上げたものである。そして、過去からの影響を考慮して最下段から読むとされるが、その中央の虚実を最下段から組み合わせて出来る八つは、2（中央の虚実）の3乗（三段）で、想定した「陰陽爻選択前・八パターン」と同じである。とすると、「陰陽爻選択前・八パターン」相互の関係分析は八卦・変化過程の相互の関係分析検討ということとなる。図1は、ここまでを整理したもので、本論分析の枠組みを示している。

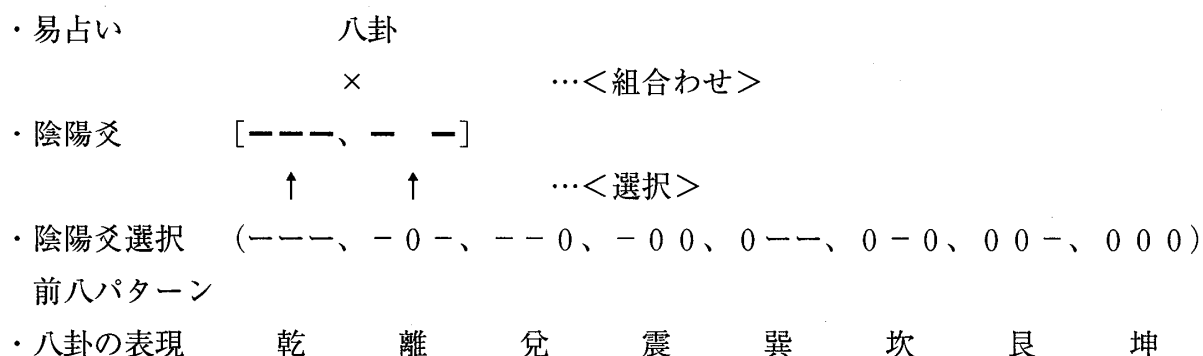


図1 本論分析の枠組み

注)、0は横棒がないことの表示。以後、この八パターンを検討する時は()の表示方法で行い、八卦などで用いる陽爻 [---] と陰爻 [— —] の場合と区別する。そして、(×)の内訳は「陰陽爻選択前・八パターン」と同じである。

* 顕と隠

[---] と [— —]。この二つのパターンには「左・右の位置に横棒がある」という共通点があるが、横棒は「虚ではなく実…高田淳 1988 易のはなし」を示す。つまり、左右の一方もしくは双方が「虚」の場合は使用されず、左右双方が「実」の場合のみが使用され、中・位置の虚実によって陰陽の爻が区別されており、三段に組めば八卦で、六段に組んだ六爻の場合、その組み合わせは2の6乗の64通りとなる。これが六十四卦で、たくさんの易解説書では、この陰陽二爻から六十四卦への展開が説明されている。が、私が注目するのは、この展開ではない。この

展開の出発点である陰陽二爻と陰陽爻選択前八パターンとの関わりである。この点を「陽爻・陰爻の記号化には先の陰陽爻選択前の八パターンが潜在的にあり、そこから [---]・[— —] が選択されている」との前提に基づいて検討する。

さて、八卦は [---]・[— —] を過去の影響を考慮して三段に組んだものだが、同様な展開は心理学研究でも行われる。時間経過を前期・中期・後期に分け、二分されたある事象の出現性を検討するという研究がそうであり、この中期に刺激・介入を意図的、操作的に行って前期と後期の比較をするとすれば、これは心理学実験としてお馴染みの方法である。が、易の展開には意図性、操作性はない。つまり、易が注視するのは自然な変化である。この対比から心理学でもしばしば登場する「顕・隠」の区別が思い浮かぶ。事実、易の解説に「隠れている状態」を示すユングの元型概念がしばしば登場するが、八卦を構成する [---]・[— —] で、「顕・隠」が該当するのは「中央の位置における実・虚」であり、「実として顕れた、常に横棒のある左右の位置」は該当しない。が、左右の横棒がなければ中央の実・虚は区別できない。これは、左右を「実・顕」とした時、中央は「実・顕もしくは虚・隠」となるが、「隠」はそれが無いことではなく、我々に「見えない」状態を示している。心理学でいう「閼・外」と言い得る。換言すれば測定道具（知覚も含めて）が持つ測定能力限界を超えた事象である。「見えない＝無し」なら簡単だが、我々は「見えない世界」を様々に構成する。例えば、不可視の世界として、神・量子・心理学でいうブラック・ボックス・無意識など様々にあげることが出来るが、本論の枠組みを超えるので議論しない。が、易が「見えない世界」をも考慮に入れようとするベクトルを持つことだけは確認しておく。というのは [---]・[— —] の左右の位置に「実として顕れる」横棒を固定化し、「中央の実・虚」を横棒の有無で区別しているからである。

さて、「陰陽爻選択前の八パターンが潜在的にはあり、そこから [---]・[— —] が選択された」と前提したが、選択を行うには必ずそれを支える考えと仕組みが要る。が、[---] と [— —] のパターンそのものは記号として提示されるのみで、この点については語ってくれない。私なりに類推するしかない。もし、設定した前提が正しいなら、つまり、(---)・(— —) を陽爻 [---]・陰爻 [— —] として選択し、代表パターンとしたとするなら、その代表化の過程に「易」自体の考え方が反映していなければならない。というのは、もしそうでなければ、易の体系があやふやな、一貫性のないものになるからである。この基本的な検討方針に基づいて、想定した陰陽爻選択前八パターンの質的分類を試み、種々の「易」研究書で述べられている見解を当てはめてみるという方法を採用。この方法は、現在進めている凡兆の俳句分析、特定言語の使用頻度に注目して多頻度定式を抽出するという、量的分析とは異なる。が、パターン、多頻度定式などの成立には必ずそれを成立させているルールがある。例えば、「碁盤の外に打ってはならない」というルールが最も働く「場」・四隅で、囲碁の定石は発生する。つまり、「パター

ン・定式・定石とルール」の関わりという点では同じ分析視点に立てる。が、ルールには論理的、社会的、歴史的、信念的などなど種々ある。我々の生活スタイルと社会的ルールの関わりに注目すれば、それは社会心理学の基本テーマとなり、この視点から「易と日本社会（場）の関わり」といったテーマが浮かび上がるが本論では検討対象としない。

*ルールの見直し

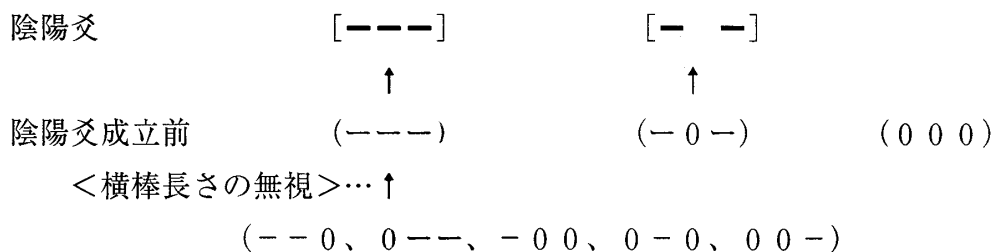
陰陽爻選択前八パターンには、a) 横棒の有無、b) 「左・中央・右」の三つの位置、という外から見える二つのルールがある。ではこの外部的なルールを外せばどうなるのだろうか。ルールは言うまでもなくその外部的に顕現化された体系の構造・機能に潜在するものだから、そのルールを外せば、そのルール設定前の姿が現れる。本論の前提は「陰陽爻成立前八パターン（一一一、一一〇、一〇一、一〇〇、〇一一、〇一〇、〇〇一、〇〇〇）から陰陽二爻が選択された」である。そこで、この八パターンを対象に、a) 横棒の有無、b) 「左・中央・右」の三つの位置、の二つのルールを見直すことを試みる。つまり、ルール設定前の姿を考えようというわけである。

まず、a) 横棒の有無、である。このルールに基づいて、陽爻選択前・八パターンを分類すれば、横棒の有る七つの（一一一、一一〇、一〇一、一〇〇、〇一一、〇一〇、〇〇一）と横棒の無い（〇〇〇）に分類できる。いうまでもなく、これは「中央の位置の虚実」のみならず、「左右の位置の虚実」をも問うた時の分類である。次に、b) 左・中央・右の三つの位置、というルールの無視が可能なパターンに注目する。その一つは左・中央・右の位置すべてに（〇）がある（〇〇〇）であり、もう一つはすべての位置に（-）のある（一一一）である。この（〇〇〇）と（一一一）は全く異なるが、易に「無極にして太極」の言葉がある。もし、横棒の有る七パターンと横棒のない一パターンの合計の八パターンで全て（ $7 + 1 = 8$ の「和」の計算がなりたつ補集合）とすれば、先に述べたように太極は「一・有」だから、「有」を否定すれば「無」となり、「無」を否定すれば「有」となる。とすると「無極にして太極」をどう理解すればいいのだろうか。立川武蔵（1986）は龍樹の『中論』の分析で、五種の補集合を指摘しているが、そのなかで「滅後の世尊・現在住の世尊」という補集合をあげる。これはいわば「有→無」と「有←無」のベクトルの相補性を示すが、易は変化を扱っている。つまり、「無極にして太極」はこのようなベクトルの相補性を示すと理解できる。これは「栄枯盛衰、盛者必滅」などの考えとの関わりを想起させるが、この点の検討は留保する。というのは、「衰・滅」が示すのは（〇）なのか、陰爻「--」の「虚」なのかの内容の検討が要るからである。

さて、人々の現実生活を快適にするために七つ（十の太陽という説もある）有った太陽を弓で射て一つにするという面白い中国神話を聞いたことがある。この神話が示すのは「七→一」の変

化だが、太陽は「一つ」とすれば、「七つの太陽、もしくは七つに変化する太陽」という物語を「一→七」の展開に基づき神話として作り出したことになる。つまり、ここから神話形成における「七←→一」のダイナミズムという興味あるテーマが浮かび上がってくるが、この点も留保し、この七つのパターンから陽爻 [----]・陰爻 [— —] が選択されたとするにはどのような相互の関わりが要るかを次に検討する。つまり、b) 左・中央・右の三つの位置、のいずれかに横棒のある七つ、(---、--0、-0-、-00、0--、0-0、00-) は、どのように分類できるかである。

b) 左・中央・右の三つの位置すべて、という条件のもとでの横棒の有無に注目し、(---) と (000) を対比したが、この (---) が陽爻 [----] を代表するとしてみる。そこで、(---、--0、-0-、-00、0--、0-0、00-) から (---) を除く。(---) と六つの (--0、-0-、-00、0--、0-0、00-) に分類できる。(---) は全ての位置に (0) がないが、残りの六つには左・中央・右の三つの位置のいずれかに (0) がある。先に陽爻選択前八パターンは三段で構成される八卦の中央の実・虚を示すとし、參天兩地の言葉をあげた。これは「実・三が天」を示すことである。すると、(---) を「天が常に実として顕れる」と理解できる。そこでこれを基準に (---、--0、-0-、-00、0--、0-0、00-) から (---) を選択し陽爻 [----] としたと考える。では、陰爻 [— —] はどう考えることができるだろうか。陰爻 [— —] に相当するのは (-0-) である。そこで (--0、-0-、-00、0--、0-0、00-) から (-0-) を除くと残り五つの (--0、-00、0--、0-0、00-) に、いわば切れ目がない。トポロジイを持ち出すまでもなく、切れ目のない横棒は長さが違って我々には同じパターンとしか認知できない。つまり、我々の認知を考慮すれば、横棒に切れ目のない (---、--0、-00、0--、0-0、00-) は陽爻 [----] と同じパターンになる。が、陰爻 [— —] を代表するとした (-0-) はここには含まれない。このような陽爻 [----] に注目した差に基づき整理したのが第二図である。



第二図 横棒長さの無視による整理

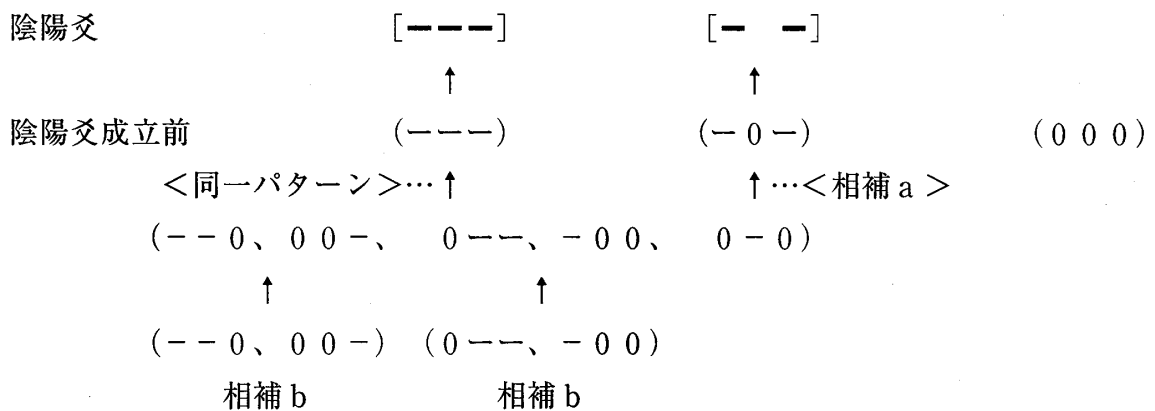
では、陰爻 [— —] はどうだろうか。そこで、(-0-) をみる。(-0-) を、構成する二

本の横棒、中央の「0」という基準で見れば、(-- 0、 - 0 0、0 --、0 - 0、0 0 -) には (- 0 -) と共通性を持つパターンがある。「二本の横棒」基準では、(-- 0、 - 0 -、0 --) と (- 0 0、0 - 0、0 0 -) に、「中央・0」では、(-- 0、0 - 0、0 --) と (- 0 0、 - 0 -、0 0 -) に区別できる。二段に並べてみる。

二本の横棒・基準 (-- 0、 - 0 -、0 --) (- 0 0、0 - 0、0 0 -)
 中央・0 ・基準 (-- 0、0 - 0、0 --) (- 0 0、 - 0 -、0 0 -)

(-- 0、0 --) と (- 0 0、0 0 -) を上下で対応させると、二つの基準で (- 0 -) と (0 - 0) が逆転している。そして、(- 0 -) と (0 - 0) は相補的である。(-- 0、0 0 -)、(0 --、 - 0 0) も相補的だが、(- 0 -) と (0 - 0) との相補ではない。つまり、(-- 0、 - 0 0、0 --、0 - 0、0 0 -) の五つはある相補性を持つが、陰爻 [- -] となる (- 0 -) との相補性を (0 - 0) が持つのに対し、(-- 0、0 0 -)、(0 --、 - 0 0) は持たない。これは、(0 - 0) が (-- 0、0 0 -)、(0 --、 - 0 0) と異なる相補性を持つことを示している。

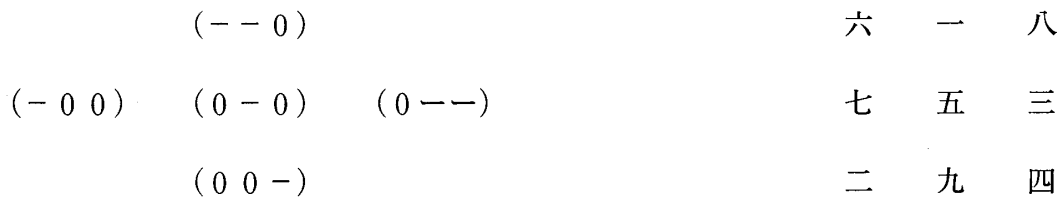
ここから、(-- 0、0 --、 - 0 0、0 - 0、0 0 -) は、横棒長さの無視をした場合には (-- -) と同一だが、(- 0 -) との相補性を基準にすれば、(0 - 0) と (-- 0、 - 0 0、0 --、0 0 -) に区別できると整理できる。第三図でこれを示す。



第三図 (-- 0、0 0 -、0 --、 - 0 0、0 - 0) の分類

* 関連する考えの利用

(--0、00-、0--、-00、0-0) の相互関係はどう位置づけ可能なのだろうか。ここで陰陽論と関連するとされる二次元配置を持つ五行の考えを導入する（但し、陰陽五行説と総称するかどうかには諸説ある）。その理由は、一次元的分類では「虚実、陰陽というたれど分けようにも分けられん 混々沌々ごちゃまぜに みんなまとめてぐるぐるぐるぐる 馮驥才 1988」の混乱に陥るからである。吉野裕子（1983）は、「陰と陽の二気が交感交合して、その結果、天上には日月をはじめ五惑星その他の星が生じ、地上には木火土金水の五原素が生じた…五行の「五」は、この五原素を示し、「行」は作用とか動くことを意味する…この木火土金水は輪廻・循環する」とする。この説明には天上・地上の「五」があり、縦・横・斜の和が十五になる「河図・洛書」と言われる魔法陣（九数図 第五図）に対応させて方角を示す九星図（天上）の中央は「五黄」で、木火土金水（地上）の配置では中央に「土」がある。そこで、(--0、00-、0--、-00、0-0) の五つとの対応を想定し、(-0-) と相補性がある (0-0) を中央、さらに他の (--0、0--、-00、00-) を上下・左右に相補性が現れるように配置してみると第四図となる。



第四図 (--0、00-、0--、-00、0-0) の配置

第五図 九数図

(--0、00-)、(0--、-00) の相補性は合計三本の棒で三つの位置が全て埋まる配置という意味だが、九数図の上下・左右の和が十ということと類似する。さらに、九数図の上下・左右・中央の位置にある数はすべて奇数（陽）だが、第四図の(--0、00-、0--、-00、0-0) は(---)と同じ、つまり、奇数（陽）である。ここから第四図は九数図の奇数（陽）の配置を示すと考えられる。が、九数図には九つの数があり、偶数（陰）が配された「斜め」の位置の四つの数が足りない。とすると、第四図の斜めの位置に（陽）と相補する（陰）が要ることになる。もし、(-0-) のみを（陰）とすれば、これ以上展開のしようがない。が、第四図の整理は(-0-) との相補性に注目して(0-0) を中央に置いたものである。つまり、(--0、00-)、(0--、-00) の相補性は中央に(0-0) をおく限り、上下・左右の相補性としか表現できない。そこで、第四図の上下左右にある(--0、00-、0--、-00) のそれ

ぞれにも相補性があると考える。(-- 0、0 0 -、0 - -、- 0 0) を陽とすれば、その相補の相手は陰だが、九数図と並んで紹介される十数図(略)では、この陰陽の組み合わせ、差が五となる奇偶数の四つの組み合わせが上下左右に配置される。なお、十数図では新たに「十」が「五」と組み合わせられるが、ある操作(展開・略)を加えれば九数図になる。

*まとめ…太極・「一」

最後に太極の「一」を考える。先にあげた「陽 [---] は一であるとともに三、陰 [一一] は一であるとともに二」の考え方は「一は偶数でもあり奇数でもある」を示し、「易」では太極をこのような性質を持つ「一」、いわば分離できない表・裏と捉えている。この太極の言葉からイメージするのは全体、いわば大きな数である。が、偶数の定義は「2で割り切れる数、つまり余りの1が生じない数」であり、この「2」を最小値とした計算で生じる「余りの1」は明らかに「2」より小さい。このように、大きな数であったり、小さな数であったりする「一」を、易では始数とのみ固定せずに、終数ともしているが、大きな数を天の数とすれば、最小値・2よりも小さな「余りの1」はどう位置づくだろうか。易では「二」を地の数とする。そこで「天・地・人」を想定すると「余りの1」は人となる。調べると、「余」には「われ、自分」の意味があり、同じ意味を持つ「豫」は六十四卦の一つで、「人の心がやわらぎ楽しんで、よく服従するかたち」とある(新釈漢和・新訂版 昭和59年 明治書院)。どうやら、「余りの1」を「人」と考えてよさそうである。このことは陰陽論が天地の動きを、陰(二)・陽(三)の二分法でまず考え、そこから人(余りの1)が生じるという枠組みを持つことを示すが、なぜ「天人合一」といった具合に「天と人を同じ(一)」で表現するのだろうか。非因果原理によるマクロコスモス(天)とミクロコスモス(人)の同時発生(ユングの共時性)による説明があるが、発生とは変化である。そこで、いわば静的な第四図の配置を具体的に「変化」させてみる。注目するのは「余」の字を含み、「ひしゃくで汲み出す」という「人」の動きをイメージさせる「斜め」方向である。まず、右上から左下の斜め線で第四図を折り重ねると(-- 0 ↔ 0 - -)、(- 0 0 ↔ 0 0 -)となる。我々は太陽の動きを地上の日時計の棒の逆方向の射影で読み取る歴史を持つ。(0 - 0)を日時計の棒とすれば、(-- 0 ↔ 0 - -)、(- 0 0 ↔ 0 0 -)が示すのは同時発生の相互射影である。次に、左上から右下の斜め線で折り曲げて重ねると、横棒が左・中央・右の全てを占める(- - -)となる。が、(0)に注目すれば、それは(0 0 0)となる。つまり、(- - -)と(0 0 0)が共に生じる。ここに「無極にして太極」が現れると考え、検討を終わる。

さて、本論は陰陽爻選択前・八パターンを設定し、第四図を折り曲げる行為で終わったのだが、易の卦は、50本の筮竹から、「余りの1…人」を示すと理解できる1本を「誠」を持って除く、

といった「人の行為」を通して現れるとされる。すると、私の易理解は「設定→変化（折り曲げる）」の過程で生じたことになる。これは同時に、私の易理解の範囲が、私が行為し、展開できた範囲にとどまることを意味する。つまり、私の易理解が易理論から見て正しいかどうか、それは分からない。が、易について今後検討する時の私の枠組みとなることは間違いない。考えてみると、フィールド・リサーチも同じ経過をたどる。つまり、1、素人としてフィールドに最初に接した時にいくつかの疑問が生じる。2、その疑問をもとに手に負える範囲で展開して仮説を設定し、3、その仮説を持ってフィールドに行き、4、仮説を支持するデータがあるかどうかを検討する。が、フィールドは心理学実験のように統制されていない。つまり、極めて豊かなデータがそこにはある。そこで、5、フィールドに関わる新たな枠組みを探し、6、自らの仮説がその枠組みに当てはまるかいなかを検討し、7、新たな仮説を展開する。けれども、フィールドで得たデータの全てが網羅できるとは限らない。本論でいえば、陰陽五行説の五臓、五味、五虫、五常などの五行配当の考えを理解する手掛かりを、現在の私は持っていない。これらのことを考えるには、本論の対象とした記号表現とは異なる表現を分析の対象とする必要がある。つまり、8、自らの行為で検討しえた限界領域を見定める。

本論の検討を通して仄かに見えてきたのは、永田良昭（1997）が問う、行動研究・社会行動研究における人間観（暗黙裡の仮説）、個人主義の問題・ミクロ-マクロ問題、行動研究は誰にむけてのものか、の問題である。その詳細を議論する余裕はないが、本論の分析枠組みの鍵概念となったのは相補性である。そして、最初に設定しえたのは、いわば静的な全体における相補関係であったが、最後には変化を想定した相補関係を考える必要が生じた。これは相補性について、（余りの1）である研究者を含めた関係の中で、もっと多様な検討が要ることを示唆している。ここに多分、五行説における生成、相生、相克、といった動的展開が関わると思えるが、この点については今後考えることにする。

参考文献

- * 馮驥才 1988 陰陽八卦 百花文芸出版社 納村公子訳 1999 陰陽八卦 小学館文庫
- * 加地伸行 1994 易の世界 中公文庫
- * 永田良昭 1997 大衆社会化現象の心理的指標の検討および相関的、因果的關係にある巨視的変数
平成6・7年度科研、研究報告書
- * Simon、H.A. 1969 The sciences of the artificial. M.I.T.Press 高宮晋監修 稲葉元吉・吉原英樹訳
1977 新訳システムの科学 ダイヤモンド社
- * 高田淳 1988 易のはなし 岩波新書
- * 竹内実 1967 中国の思想 伝統と現代 NHKブックス

- * 立川武蔵 1986 「空」の構造 「中論」の論理 第三文明社
- * 吉野裕子 1983 陰陽五行思想からみた日本の祭り 弘文堂